

心の持ち方

大和勇三著

教養新書 17

心の持ち方

大和勇三著

池田書店

教養新書 17

心の持ち方

昭和三十年十一月二十五日 印刷発行
昭和三十一年八月十五日 二版

定価 一四〇円

地方売価 一五〇円

著 者 大 和 勇 三

発行者 池 田 敏 子
藤澤市鶴沼二五〇一番地

印刷者 行 木 芳 郎
東京都文京區柳町十一番地

發行所 株式會社 池 田 書 店
藤澤市鶴沼二五〇一番地
(東京都千代田區神田三崎町二ノ四)

電話 九段(調)五九六三番
振替口座東京一六五四二五番

自序

今の日本にはびつこの状態がいろいろな面に出ている。心の持ち方にもこの日本的病気がみえる。びつこの病理は学識や哲学のある人々にさえもくらい影をおよぼしているのにびつくりすることもある。心のバランスも二つの同じ大きさの車輪がそろっていないと、とれないものだ。一つは世の中をよく理解してゆく知識である。もう一つは生活の中に入っていく知恵である。知識や学識がみがかれていてもまた理想を高くもつていたにしろ、この片輪では一步も動けない。生活の知恵の輪がなくてはならないのだ。それもわる知恵でなくて誠実と善意の裏付けのある知恵である。このくらしの知恵について、まだ不十分な注意しか払われていないような感じがする。人と人との間を美しく結ぶ人間的基盤がおろそかにされていて観念だけの高ごえの議論ばかりに耳が傾けられすぎている感じがする。

ここでいう人間的基盤とか、人間をつくるのかいいうことは、「聖賢」の倫理を身につけたり

自序

説教的修身科をおさめたりしようというのではない。人らしい人、現代人らしい寛濶聰明な人間を、美しく強い生活の達人を考えてみたいのである。

私は世の中に理性と知識の目を向けていない人にもあまり魅力を感じない。同時に学識があつてもくらしの知恵に関心がなく、人間らしさを大切にしない人々にもまた一向に魅力を感じない。

この小著に採録した短い雜感雜想は高ごえの議論が忘れておろそかにしているものを、逆に主張したいと思つて書きたため、日本經濟新聞の灯という欄に過去四年にわたつて連載したものの一部である。今はこんな沢庵くさく、年寄りくさいつぶやきに耳をかす人があらうかと何度も途中でいやになつた。しかし、細々乍ら続けずにいられなかつたものは何か物をいうべき空白があるという漠とした感じに刺戟されての事である。

生活の馬車をあやつる馭者の心の持ち方にしては時には消極のそしりを免かれぬかもしれない。しかしお調子の高い感情や頭でつかちの觀念でわり切つていくには、生活はひどく微妙であり、そしてもつと複雑な固さをもつてゐる。

この小著が、このような現代の忘れもの、生活の知恵を考えることに少しでも役立てばこれ

自序

に越したうれしさはない。

昭和三十年十一月

大
和
勇
一

目次

第一部 心の灯

人生の断層……………	二三
焰の悩み……………	二五
古風な修練……………	二六
独りの楽しみ……………	二八
としよりの功……………	三〇
昔の丹念……………	三二
合理に弱い素直……………	三三
善意の力……………	三四
「英雄的」善意……………	三六
善意の軽視……………	三七

善意の使い方……………	三八
予備の心……………	三〇
信頼に応える心……………	三一
焦点のぼやけた心……………	三三
我慢のしどころ……………	三五
素直な心……………	三六
読みためるということについて……………	三八
剛氣をわかす手……………	三九
「もたれかゝつた」意識……………	四一
心の「折り目」……………	四三
事務と才能……………	四四
事務の聖人……………	四五
神経の豊かな人と細かすぎる人……………	四七
沸騰点の低い人……………	四八
花の美しさ……………	五〇
緊張の美しさ……………	五二

勝負の世界……………三

「偶然」の活用……………五

熱鉄は機敏に打て……………六

よく効く小言……………六

小さい救い……………六

妙な癖一つ……………六

ブルータスお前もか……………三

卑近な勇氣……………三

考えている眼……………七

見栄の注文……………六

可愛氣について……………七

遅れてくる幸福……………三

横幅のない徳義……………三

A しなびた感覺……………三

B 裸武者的感覺……………五

C 日本的親近感……………七

D 野球小僧的感覺……………七

E 枯れた神經……………六

仕事の仕方……………六

食べ方のテンポ……………六

煙草の吸い方……………六

新聞の読み方……………六

子供の感傷……………六

子供の日の祕藏品……………六

親の心……………六

子供の場……………六

子供の世界……………六

ポシビリテイ……………六

男の「こわさ」……………六

風通し悪い関係……………六

永続の徳性……………六

自己主張……………六

「量」の力……………	一〇一	志あらば避く……………	一三八
予感……………	一〇三	書いてみましょう……………	一三三
設備とモラル……………	一〇四	教養試験制漫想……………	一三九
物臭太郎……………	一〇六	仕事と支持……………	一三二
はつたりデザイン……………	一〇七	仕事の満足感……………	一三三
見えない家事……………	一〇九	出張前夜の哲学……………	一三四
体験……………	一一〇	「猫のミルク」……………	一三六
おもて天国……………	一一二	背のびする癖……………	一三八
ロールバック功勢……………	一一三	たのみ癖……………	一四〇
台所は牢なりや……………	一一五	のぞきたい癖……………	一四一
こたつ専制主義……………	一一六	神経のない人……………	一四三
針と糸……………	一一八	あとを濁す人……………	一四五
人目に立つこと……………	一二九	釘抜け感覚……………	一四六
愛の花咲く場……………	一三二	虫の好く顔……………	一四八
対妻信用……………	一三三	人間の弱さ……………	一五〇
余韻の味い方……………	一三四	遊び方について……………	一五一

第二部 ヨーロッパの窓

第二部 ヨーロッパの窓

パンパンの影なき国……………一五九

せまいのは同じ……………一六一

芬蘭婦人の職業……………一六三

善意と間抜け……………一六四

犯さず犯されぬ国……………一六六

大学出の踏切番……………一六八

女の体力……………一六九

蒸風呂仁義……………一七一

母達は哀しからずや……………一七三

ストックホルムの掃除夫……………一七四

農村の顔……………一七六

子供の広場……………一七七

自転車国……………一七九

道徳と経済……………一八一

レストラン「オスカー・ダヴィッドゼン」……………一八三

いや果ての税関……………一八四

スイスの神経……………一八五

背広の「市民兵」……………一八七

「自然」のみならず……………一八八

フランクフルト空港……………一九〇

ドイツの資本家……………一九二

サン・パウリの女……………一九三

エキッス線のある店……………一九五

としよりの出る幕……………一九六

立派な〳〵不良住宅〳〵……………一九八

ロンドン帽子社会学……………一九九

ロンドン・ラッシュ・アワー……………二〇一

会釈……………二〇三

間のあく癖……………二〇四

バランスのとれた国	三〇六
ロンドンのパチンコ	三〇八
ロンドンの騒音量	三〇九
イギリス流の訪問	三一
美しい老齡	三三
国際バスの旅から	三四
気らかな旅気分	三六
「不景氣」な火事	三七
エッフェル塔上にて	三九
筆算の郡	三〇
パリの喧嘩	三三
ボルガータ・フォルタリコ	三三
街頭の「モーゼ」	三五
カラチ空港	三七
バンコック空港	三八
にがいひる寝	三〇

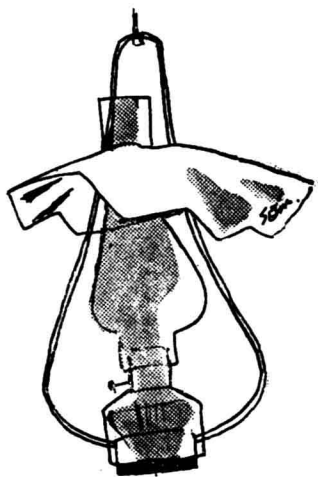
小さい断定	三二
どてらの感覚	三三
危い「実際」	三五
歐洲の街燈	三七
玩具の世界	三八
異国人を見る視線	四〇
シガない天国	四一
夫人同伴	四三
良識で出来た町	四四
河岸の宮殿	四六
ヴィゲランド美術館	四七
ハンブルグの失業男	四九
手を拍つ看守	五一
噴水の美しさ	五三

カット 朝 倉 撰

心の持ち方

第一部

心の
灯



人生の斷層

ぬるま湯からもうひとつの別の湯槽に移る時、あのちよつとの間の肌寒さのような心の寒さを人生行路の途中で幾度か経験するものです。じつと入つていればいいが、ちよつとぬけるとひどく寒く、後もどりしたくなるあのふんぎりのつかぬ寂しい気分は、一應わかります。たとえば小學校を出て中學校に入るとき、中學を出て上級學校に進む時などの卒業期の、喜びに伴う哀愁などもそれで、去り難い感慨がわくもの。また廿歳、卅歳、四十歳とそれ〴〵人生の區切りの歳に達する時などにも十代、廿代、卅代への訣別気分と感慨を特別に深く感じる人もあります。十代なら何か仕事ができると神童、天才とかいわれるが、廿代では同じ仕事をしてもせい〴〵才子の稱をうるくらいといつてゐる人もありますが、とにかく次の年代への飛躍の前には過去への哀愁をおぼえるもの。また會社、銀行、役所勤めの人々がポストを替えられる。

誰がみても左遷される場合は一應別としても、馴れたポストを動かされることにひどく心の寒さを感じる人々もあります。つまり馴れたこちらのぬるま湯の湯槽から一たん出る寒さをとくに感じる人もあるというわけです。

しかし、十代から廿代へ、廿代から卅代へと、おい／＼人生の坂路を上りつめてみると、やはり廿代には廿代の哀樂、卅代には卅代の哀樂があつて、時に苦しいがまた時に楽しく、それぞれの味があるもの。このように、馴れたポストから次の馴れぬポストに移る時にもちよつと心寒い哀愁があつても、別の湯槽にとび込んで、さてすつぽりつかつてみれば、前よりもぬくぬくいゝ気分になれるということはよくあるものです。

人生コースに時々あらわれるこの種の斷層の寒さを味わい、人は案外成長していくのかもしれない。實はなんでもない束の間のはだ寒さに負けないようにどころか、むしろはだ寒さを樂しんで飛躍する気分の方が前向きの気分です。